

源流の四季

第44号(2012年1月)

冬

❄️ Winter ❄️

発行所/多摩川源流研究所 〒409-0211 山梨県北都留郡小菅村1911
TEL 0428(87)7055 FAX 0428(87)7057
http://www.tamagawagenryu.net
E-mail:b-nakamura@npokosuge.jp

発行責任者/中村文明
協力/多摩川源流協議会(甲州市・奥多摩町・丹波山村・小菅村)
多摩川源流観察会 NPO法人多摩源流こすげ
印刷/(株)ケイ・トウ・ワン



小菅村橋立のカケジク畑 (撮影 中村文明)

Contents 目次

降矢村長新春インタビュー	2~3
もみじ橋景観ワークショップを実施	4
各地区景観懇談会を開く	4
マコモタケが人気メニュー	5
多摩川源流大学のすべて!	6
第2回全国源流サミットに350名参加	7
「ミューゼス研究会の活動紹介」報告	7
ありがとう小菅村 ありがとう自然	8

降矢村長 新春インタビュー

村民体育館の完成間近

中村 あけましておめでとうございます。昨年は、東日本大震災がおこるなど大変な年でしたね。

村長 あけましておめでとうございます。新年に当たり日頃から小菅村のむらづくりにご支援、ご協力を頂いている村民の皆さん、多摩川流域の皆さんに心から感謝をしたいと思います。確かに、昨年は大震災や台風による大きな災害が起こり、大変な苦難の年でし



降矢英昭小菅村長(村長室)

た。被災された方々の一日も早い復旧・復興をお祈りし、私たちも可能な支援を続けたいと考えています。

中村 いよいよ小菅村体育館(中学校体育館)の完成が間近になりました。幾つかお聞きしたいのですが、先ず経過を教えてください。

村長 実は平成17年の耐震診断に始まりです。診断の結果は立て替えなければならぬ建物である、耐震補強工事の対象にならないかなり危険度の高い建物であることが判明しました。

中村 当時は財政赤字で手が出せなかったわけですね。

村長 建物が古いこともあって長年の懸案でしたが、耐震診断の結果をふまえ、早急な建て替えが求められていました。財政健全化も進み、平成21年、22年と財政調整基金や公共施設整備基金への積み立てもできましたので、今年度事業で村民体育館の建設を決意しました。

中村 なるほど、準備が整ったわけですね。ところで、村民体育館建設に込める村長の思いを聞かせて下さい。



建設すむ小菅村体育館(12月15日)

率先して小菅の木を 利用すること

村長 小菅村は、内閣府の支援を受けて、平成20年、21年に「地方の元気再生事業」に取り組みしました。「元気再生プロジェクト」の重点の一つがスギやヒノキなど木材資源の流域での活用でした。狛江市や川崎市で小菅の木を利用した取り組みが進みましたが、小菅に視察に来られた方々にどうぞこれを見て下さいという製品がない、公共施設がない。これではいけないと強く感じました。

中村 視察にこられる流域の方々に小菅の山だけでなく、ちゃんとした公共施設も見てほしいと痛感されたわけですね。

村長 小菅の木を流域に推奨するには、先ず小菅村が率先して小菅の木を利用することが大事です。平成21年には、小学校の体育館の改修の際に小菅のヒノキで内装しました。平成22年には保育所の床、壁、廊下、イスや机なども小菅のヒノキで作りました。保育園のこどもや保母さんには好評でしたが、評判を聞きつけてやってこられた村内の高齢者の方々からも「やっぱりいいね」と声をかけられました。

中村 そして小菅村体育館ができあがるわけですね。

木づかい文化の シンボルとして

村長 財政難で延びましたが、ここでやるからには小菅の木を使った体育館を造りたい。「元気再生プロジェクト」で木材の活用を掲げ、木づかい文化の普及を訴えてきましたので、そのシンボルとして小菅産の木を利用した体育館を建てようと思ったわけです。

中村 山梨県への働きかけもやられたと聞きましたか。

村長 県庁へも何回も何回も足を運びながら相談にのってもらい、横内知事や林務部長に県が所有する基金を小菅村に重点的に配分してほしいと繰り返し働きかけました。



小菅村のカエデ(11月7日)

中村 予算規模はどれくらいですか。

村長 総事業費が3億3千万円です。県からの支援やふるさと納税寄付金などで完成にこぎ着けました。日頃小菅村が推進している源流の村づくりに対する県の評価と理解があり、さほど財政的な重荷にならずにすみました。

中村 体育館のデザインも斬新ですね。体育館建設に当たってどんな注文をされましたか。

村長 教育委員会を中心に、最初から一生懸命やっている人たちの気持ちに反映するように現場に委ねています。ただ、小菅村の自然や風情というか、環境にあったものを造ってほしいという気持ちは伝えてあります。

中村 屋根や壁にも工夫が施されているようですね。

デザインに 日本の伝統的な配色法

村長 屋根や壁に市松模様が使われています。注文したわけではありませんが、たまたまデザインが出来上がったときに市松模様の屋根や壁だったということです。日本の伝統的な配色法で高級感があり気に入っています。

中村 流域の皆さんにも是非見てほしいですね。

村長 そうですね。小菅村の木をふんだんに使って造りましたので、「さあこれを見て下さい」と胸を張って見てもらえると思います。小菅村だけでなく、公共事業でもっともつと地元材を使ってもらい、山林所有者にお金が回るようになればいいし、そうすれば森林経営が持続できるのではないかと、そんなきっかけになればいいと思います。

中村 この体育館建設には、小菅の木がより一層活用される道を切り開きたいとの思いが込められていますね。

村長 村の山林はこれからまだまだ間伐が必要です。森林作業道路(路網)も入れなければならぬ。もともと研究しながら村の思いを県や国につけ、山林を沢山抱えている地域がもっともつと元気になれるような政策が打ち出されることを期待しています。

財政健全化へ第一歩

中村 ところで昨年10月、小菅村が財政面で大きく改善し財政健全化が進んだと新聞で報道されましたね。

村長 新聞報道の通り、この3年間で財政健全化の目安になる「実質公債費比率」が、当時県内最悪の数字である19.7%↓14.9%(平成22年度決算)まで下がりました。何とかしなければ何の事業もできない、とにかく財政を健全化したいと、自ら職員の先頭に立って行動してきました。

中村 どんな手法で健全化を達成されたのですか。

村長 財政健全化というと、ただ歳出を削減することを考えますが経費の削減ばかりでは困りますので、国の100%の補助金を獲得し、村を活性化する諸事業や高規格救急車や消防自動車が無償貸与、保育所の改修など様々な公共事業を手がけ、当面の課題を解決しながら村民が不便を感じないで財政健全化が実現できたと自負しています。

村に大勢の 応援団が生まれ

中村 なるほど。ふるさと納税寄付金など村内外の方々からの協力も広がりましたね。

村長 今村が困っている、困っ

ているなら何とかしようと多くの方々に呼びかけて頂き多額のふるさと納税寄付金を頂きました。又ボランティアでクリーン作戦や花を植えて村を綺麗にしようと活発に活動して頂くなど村を美しくしようと大勢の応援団ができました。

中村 小菅の景観を良くしようと「花と緑の郷づくりの会」の方々の活動は活発ですね。

村長 そうですね。この間、村は財政難であったにもかかわらず、近隣に比べてみて、小菅村は大いに元気な村だったのではないかと、山梨県のほうでも評価を頂いているようです。

中村 財政健全化が達成されましたが、これからどんな変化が期待



クリーン作戦(松姫峠への道)



できますか。
村長 いや、まだ満足出来る段階ではありません。財政健全化の目安である「実質公債費比率」を11%か

12%台までもつていきたい。そうすれば、村の動きがもっと良くなります。

中村 村長、今おっしゃった村の動きが良くなるとは、どういう意味ですか。

村長 端的に言うならば、財政面で余裕が生まれ自由に使える予算の範囲が広がるということです。

村民のニーズにも迅速に 대응することが可能になる。村を元気にするために必要なことが数多く実行できるということですね。

中村 つまり、今までと違って、村民のニーズや期待に応えながら、村の未来を切り開く施策を実行できる財政状況に近づいたといえますね。

村長 そうだと思います。特に「教育に過疎はない」ですから、子どもを育てる環境を良くしていきたい。教育施設の充実や子育てに関わる方達の環境を良くしていきたいと思っています。

中村 貴重なお話し有り難うございました。



村長も一緒にクリーンクリーン(鶴峠周辺)



クリーンの先頭に女性の会

もみじ橋景観ワークショップを実施

小菅村は、平成17年、山梨県から景観行政団体の認定を受け、山梨県からの指導と支援のもと平成23年度に小菅村源流景観計画を策定することになった。小菅村は、源流景観計画策定に関する業務をNPO法人多摩源流こすげ(担当多摩川源流研究所)に委託。NPO法人多摩源流こすげは、小菅村源流景観計画策定委員会(木下正之委員長)を5月に立ち上げた。NPOと源流景観計画策定委員会は、景観学習会、先進地視察、景観資源調査、源流大学と連携してビューポイント体験ワークショップ、各地区景観懇談会などに取り組んだ。12月17日には、もみじ橋の景観ワークショップを実施し、小菅村の良好な景観づくりに向けた活動が急ピッチで展開されている。

新しい橋の名前は「もみじ橋」に

「もみじ橋」に

田元地区平山で建設が進む新しい橋の名前が「もみじ橋」と決まった。この橋は、国道139号線沿いのモミジを保存するため

保存されたモミジ

に、新しく建設されたもので、源流景観計画策定委員会が周辺整備を検討する中で、保存されたモミジを中心に景観づくりを計画することになった経緯から小菅

村に「橋の名前は『もみじ橋』に」と推薦、村はこの案を了承して「もみじ橋」と決まったもの。

景観ワークショップ当日は、景観懇談会の委員、事務局、神谷先生など14名が参加、木下委員長が「小菅村の新しい名所にしたい。訪れる方々がみんな足を止めるような場所にするために、皆さんのアイデアを出してほしい」と挨拶した。小菅村役場の黒川源流振

興課長が「新しい橋の建設に伴い、カーブした国道部分の約百メートルが小菅村に移管されることになった。駐車場やガードレールの設置も可能である。周辺をどのように整備したらよいか、提案してほしい」と訴えた。(提案は下記のとおり)

各地区

景観懇談会を開く

NPO法人多摩源流こすげは、景観計画策定委員会と協力して、景観計画に村民の意見や要望を反映させるために、10月3日の長作地区(15名参加)を皮切りに、17日に白沢地区(9名)、19日に小永田地区(12名)、31日に東部地区(19名)、11月1日に田元地区(15名)、9日に中組地区(30名)、11日に川池地区(19名)、16日に橋立地区(21名)で、それぞれ景観懇談会を開催した。

景観懇談会では、事務局から小菅村景観計画の骨子の説明を受けた後、参加者から「川の姿を見えるようにしたい」「案内板をつくってほしい」



もみじ橋景観ワークショップの様子(12月17日)

ワークショップ参加者から、次のような発言があった。

- 「駐車場に植栽スポットを設けてほしい」
- 「小菅村にある山取りのモミジ・カエデを全種類植えて育ててほしい」
- 「橋の欄干にモミジの四季の変化が分かるプレートを飾ってほしい」
- 「旧道の部分は車の乗り入れ禁止にしてくつろげる空間にしてほしい」
- 「桃の木沢のこんこんと流れる湧き水を活かしてほしい」
- 「車イスの通れる歩道をつくったらどうか」
- 「ガードレールは木製のもので色は周辺の自然に調和するものにしてほしい」
- 「対岸の山を整備し、健康な森にして景観を良くしてほしい」
- 「見栄えのいい東屋を造ってほしい」
- 「快適なトイレがあるといい」。
- 「道路上の大きな木が落下しないよう安全対策がいる」
- 「電柱を地中化してほしい」
- 「もみじ橋からすぐに川に降りて、ぐらりと散策できる道がほしい」
- 「歩道は、覆土するかどうか専門家に諮り歩きやすくしてほしい」
- 「街灯とスポットライトでモミジを照らしてほしい」
- 「橋桁の色も周辺に調和する色にしてほしい」
- 「もみじ橋とモミジ公園が連続して広がりのある空間にできないか」

など沢山の意見やアイデアが出された。

「古いサインを新しいものに変えるべきだ」「天神山の眺望をきくようにしたい」「間伐して明るい森に変えたい」「どんな小さいことでもいいから必ず実現してほしい」「できたことをみんなに知らせてほしい」など沢山の意見が寄せられた。そのなかの、長作の川の整備や田元の御所車の展望点づくりは、早速村が取り上げ改善したので住民に喜ばれている。



景観懇談会・長作地区(10月3日)

レストラン「ゼルコバ」訪問記 マコモタケが人気メニュー

「マコモタケを小菅村の特産品にしたい」とマコモ生産者の源流百姓の会(古菅丁会長)が、NPO法人多摩源流こすげ(望月徹男事務局長)の協力の下、今年も生産・販売・普及に東奔西走し、今年、山梨県笛吹市一宮町に得意先が出現した。そのお得意さんであるレストラン「ゼルコバ」を10月下旬に訪問した。(文責 中村文明)



レストラン「ゼルコバ」

歴史と伝統に 輝くレストラン

甲府盆地の東端に位置する笛吹市一宮町の一角に、こんもりとした神社森がひととき目を引く場所がある。その神社は大宮神社という地元の由緒ある氏神様である。その隣に有名なワイン醸造所のルミエールがある。明治18年に

創立された山梨でも老舗のワインメーカーのひとつである。三代目社長の木田茂樹氏は「最高品質へのこだわりは創立以来今日まで受け継がれている。格式と風格のあるワインをつくり続けてきた伝統ルミエール光という名のごとく、これからも日本のワイン文化に輝きを与える光でありたい。」と語る。

山梨産の 食材の味を守り提供

歴史と伝統のあるルミエール直営のレストラン「ゼルコバ」が平成22年にオープンした。庭園からレストランを見守るように寄り添って立つ樹齢900年のケヤキ(フランス語でゼルコバ)がレストランの名前になっている。ホームページで「フランスの三つ星レストランで修行したシェフが、山梨産の食材の味を守りながら贅沢なフランス料理に仕立てた『山

梨フレンチ』をお楽しみ下さい。」と紹介されている。

マネージャーでソムリエの佐野さんは「マコモタケをほぼ丸ごとの形でシェフが料理をしています。やはり見た目も盛りつけが大事なので、そのまま出るとお客様が驚くんですよ。」と柔らかい口調で語りかける。

マコモそのものを 出すのがシェフの挑戦

続けて佐野さんは「これは明らかにマコモタケというものを味わってもらいたいというシェフの意図で作っていると思う。実際にメニューを開発してもらってテイステイングした印象だと、食材の旬を迎えると味がしつかりしてくるので、樽でねかせたワインとあわせるとおいしく感じる、ワインが食材のおいしさを引き出せるなと感じる。」



マコモタケの料理

「やっぱりそのものをどんと出してくるというシェフの挑戦というものがあって、僕らもそこにどういったものを当てていくかと思案します。地元の人でもマコモタケを食べて、山梨にもこういうものがあるんだと再発見する感動がある。」

今の時期の王道はマコモそのものの味を引き出した調理法で出した方が私はおいしく食べられると思う。」と佐野さんは言葉を結んだ。いよいよマコモタケの料理がテーブルに並んだ。本当にマコモの形そのものが皿に盛られていた。マコモを口に運ぶとこれまで味わったことのないおいしさが口の中に広がっていく。この料理なら毎年食べなくなる。このマコモタケ料理は、この味が知れ渡れば必ずファンが増えると感じた。

すごい評判で 可能性のある食材

食事が終わった頃、橋之口シェフがインタビュに答えてくれた。橋之口シェフは「山梨のお酒もレベルが上がっているのでもううちの食材と合わせると、非常に良く合います。小菅のマコモをこういう形でお出しするようになったのは10月のメニューからです。すごい評判がいいです。1ヶ月間余りで80キロから90キロぐらい使わせていただいているでしょうか。来年はもう少し、200キロぐらいは

いくんじゃないでしょうか。」と今年の手応えを嬉しいことに来年に繋いでくれた。

橋之口シェフは、「マコモはやはり油とかの相性がいいんです。だからベーコンとかチーズとかが合いますね。可能性のある食材ですよ。後は売り方でしょうね。見せ方もあるでしょう。若い力というか、若い感覚を入れていった方がいいですよ。」とアドバイスして下さった。

橋之口シェフから「小菅村はマコモを育てるのに適しているんですか。」と尋ねられたので、「水がいいからです。水源の稜線にはずっとブナ林があって見事な広葉樹の森から育まれた水がマコモの畑に流れています。太陽もしっかりと受けて自然の豊かさや水のおいしさをそのままマコモが体現してくれていると思います。」と答えた。



レストラン「ゼルコバ」
笛吹市一宮町南野呂624
☎0553-4710207

多摩川源流大学のすべて！

～小菅で村人と若者が共に学び成長する軌跡～

連載3回目の今回は、「源流大学の講師」をテーマに、源流大学誕生期から実習を支える住民講師についてご紹介していきます。（文責 石坂真悟）

住民講師とは

「住民講師」とは「小菅に住んでいる住民の方で、源流大学の実施する住民講師養成講座に参加し修了した方」とし現在では80名近い住民が登録されています。住民講師養成講座では、「源流大学とはどういうものか」「源流大学が目指すもの」「学生との接し方」など簡単な講義と学生も交えたワークショップを行っております。



地域の作業も学生の力と協働作業

データベースによる

得意分野の管理

住民講師の得意分野・カテゴリー（農業・林業・伝統芸能・自然解説など）や居住地区、参加実習履歴など一目で分かるように事務局にて、データベース化し管理しています。このようにデータベース化することで、実習内容に適した住民講師をすぐに検索でき、また、実習終了時に実習参加履歴を入力することで、実習内容の偏りを発見したり、実習内容の検討を行ったりするのに役立っています。

住民講師制度の効果

～その1 学生の感動～

村の人から直接村の話を聞き、直接指導を受けることは何よりも学生の感動を呼び興味・関心に繋がっています。実習内容の指導はもちろん、休憩時間のお茶のみ話や雑談が印象に残っている学生も多くいます。これは住民講師が作

住民講師制度の効果

～その2 住民のやる気～

住民講師側の効果として学生への対応や指導への蓄積ができ、より効率的・効果的な実習を組めるようなアドバイスがもらえるようになったことがあげられます。この他にも講師の中には、新しく作物を作ることに挑戦したり、学生が来る時用に作業の手順を考えたりと講師陣のやる気や期待が徐々に感じられるようになっていきます。このように学生、住民が互いにより刺激となり、より良い実習を作り出しています。



講師も教えるたびにスキルアップしていく

これからの住民講師制度

今までの源流大学の实習は、他所から来た人材が実習内容を決め、そこにふさわしい住民講師を登用し、実習を実施する形をとってきました。この形は、外部人材による地域の資源を発見し活用する「よそ者視点による地域コーディネート」と同じと言えます。しかし5年間事業を実施し各住民講師も経験を積んだことで、実習内容の提案や源流大と他村民との繋がるパイプ役などを担って頂ける住民講師の「核」になる講師が生まれました。

この住民講師を「現地実習アドバイザー」として源流大学の実習やプログラムなどの決定、スケジュール作成など事務局と共に活動していただくことで、実習がより小菅の風土や生活・住民に馴染む方向へ進みます魅力豊かな地域独自の源流大学へと展開していくものと期待されます。



“なぜこの作業か?”
その原点を教えることも大切



手技を覚えるには“見よう見まね”プラス“話術”



学生の満足度は“どれだけ地域の人と関わったか”に左右される

第2回全国源流サミットに350名参加

「地域を・人を・未来をつなぐ」をテーマに第2回全国源流サミットが、10月21日～23日、岡山県新庄村で開催され、新庄中学校体育館で開かれた22日の全体サミットには全国各地から350名が参加した。



第2回全国源流サミット(岡山県新庄村)

10月21日、新庄村ふれあいセンター大ホールの全国源流の郷協議会による首長サミットには、地元新庄村、高知県津野町、奈良県天川村、川上村、長野県根羽村、木祖村、山梨県道志村、小菅村、群馬県みなかみ町の代表が出席、降矢英昭会長の挨拶、地元の笹野寛新庄村長の歓迎の挨拶の後、宮林茂幸先生が源流の役割と課題についてアドバイスした。その後、事

務局から8月に開かれた幹事会の意見や協議を受けて、(1)より効果的な源流再生に関する政策を練り上げるため、政府、有識者、源流の郷が一体となった「源流再生政策学習会(案)」を今年度で開催する。(2)来年10月の第3回全国源流サミットまでに成案をまとめ、サミットで全国民に向けた源流再生に関する新しい政策を発表することなどを提案し確認された。

22日の全体サミットでは、実行委員長の笹野寛村長が「私たちの地域は、水でつながっていることを自覚し、源流に光を当てて、これからの源流の役割についてお互いに考え、話し合える場にしよう」と挨拶、全国源流の郷協議会の降矢会長、石井正弘岡山県知事、国土交通省水管理・国土保全局河川環境課専門官がそれぞれ挨拶した。続いて旭川流域ネットワークの竹原和夫世話人が流域のユニークな活動を報告、パネルディスカッションでは「歴史と文化の水をつなぐ」をテーマに活発な意見交換が行われた。

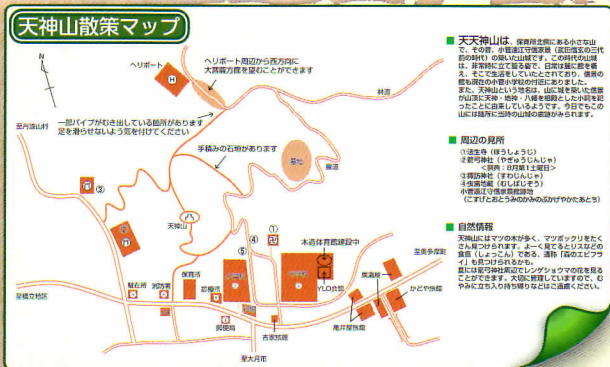


全国源流の集いでアピールする津野町の代表(10月22日)

また、笹野村長が「源流は水の源、文化の源、生命の源です。地球環境時代を迎え源流の郷はますます重要になります。源流の理解者を全国に大きく広げましょう」と高らかに「新庄村からのアピール」を発表し大きな拍手に包まれた。最後に津野町の高橋副町長が「来年は四万十の源流、高知県津野町で会いましょう」と呼びかけ全体サミットを閉会した。続いて、全体サミット終了後に参加者による交流会が開かれ、地元特産の姫の餅の餅つき大会が盛大に催されるなど、会場は大いに盛り上がりを見せた。

第3回全国源流サミット

●日時 10月19～21日
●場所 四万十源流・高知県津野町



「ミューゼス研究会の活動紹介」報告

小菅村内外の有志による地域づくり活動「ミューゼス研究会」では、村内の小さなエリアに焦点をあて紹介することで、村を訪ねた方々がこの地域で体験できるものを増やしていきたいと考えています。

その中のひとつの活動として、現在、「ミューゼス研究会」では、トレイルマップ(セルフガイドマップ)づくりを進めています。

歴史や自然など地域資源について、マップを広げ、メンバーみんなで、あれやこれやと話をしながら、地図に情報をおとしていく作業は楽しくもあり、達成感もあります。

また、小菅村観光協会やNPO

多摩源流こすげといった各団体と連携することで、情報や活動の共有も同時に深まっています。

そのような作業自体が、まさに地域を見つめることなのだと思感しています。魅力を見つければ見つけるほど、ぜひにこの宝を訪ねてくる人たちにも紹介したいという想いも強くなっていきます。

今回、最初に取りかかっているのは、小菅村役場を中心とした川池地区の「天神山(てんじんやま)」エリアで、ここは村人にとってはとても馴染みが深く、子どもの伝統行事を行ったり、山菜採りに行ったりという場所です。ここをとっかかりとして選んだ理由は、この場所を世に残したいというメンバーからの声があったからです。

完成は来春で、村内での配布やネット上での公開をする予定です。このようなトレイルマップづくりは継続して、エリア数を増やしていきたいと考えています。紹介したい自慢のエリアがたくさんあります。トレイルマップを持つて、散策する方々のことをイメージしながら作成していると、サテライトをこのようなトレイルが結んでいくというエコミュージアムの構図も膨らんでいきます。

ありがとう小菅村 ありがとう大自然

日本オフィスシステム株式会社の社会貢献活動「NOS百年の森」づくりが進展している。昨年は、春の新入社員研修と第9回ボランティア活動に続いて、11月15日に「第10回ボランティア活動」を実施した。10月のボランティア活動が大雨で中止になったため、今回は参加者が30名を超える盛況ぶりであった。参加者は、途中で長作の御鷹神社の巨樹・巨木の森を視察し、小菅村の新しい魅力にも触れるなど小菅村を丸ごと体験する新しい試みも行われた。

「NOS百年の森」のある今川森林団地では、地主の木下大吉さんが「毎回大勢の参加に感謝します。百年の森は確実によくなっています。怪我のないように今日も宜しく」と挨拶し、間伐作業に取りかかった。今回は間伐して枝払いした後、玉切りと搬出に力を入れたため、森づくりの作業の大変さを体験するとともに、「森が明るくなった」「森全体が生き返った様子」と継続したボランティア活動の成果に参加者から喜びの声が上がった。



「NOS百年の森」づくりの参加者(11月15日)

参加者の感想紹介

人間には自然と接する機会が必要

■ 初参加では御座いましたが正直申し上げて「出席して良かった」の一言で御座います。大自然の中、汗を流し、木を切り、NOS社の管理職の方と同じ目線でお話できたこと等々。社会貢献・自然・会社の社交の場として個人的にも非常にプラスになったと思います。「小菅村の印象」は、都心とは違ったやさしいオーラに包まれ非常に癒される空間・環境がある場所だと思っています。やはり人間には自然と接する機会が必要と感じました。

40年生きて初めて知った

■ この度は、「NOS百年の森」に参加させて頂きまして、ありがとうございました。お世辞抜きで、楽しかった。という事と次回も絶対に参加をしたいと思いました。大自然の中にいる事がこんなにも気持ちいいものなのかと、40年生きて初めて知った気がします。次の夏休みには、家族みんなで小菅村に遊びに行き、大自然にふれてみようかと思っています。本当に参加をさせて頂きまして、ありがとうございます。小菅村、ありがとう大自然」という気持ちです。



玉切りの木を搬出(11月15日)

森全体が生き返ってくる様子

■ 三回目でしたが、2009年が初回だったのですが、だんだん森全体に陽が当たるようになったというだけでなく、明るい感じになってくるのはうれしいですね。最初はアウトドアでの作業そのものが珍しく楽しかったのですが、今回はむしろ、森全体が生き返ってくる様子が見ることができて、目的意識が出来た気がします。小菅村でやってみようとは思って、ぜひ所長の言っていた、沢登り、沢歩きをして、妙見五段の滝を見に行きたいですね。

丸太をかついで運ぶ作業はきつい

■ 今回の活動は、今までで一番きつく感じました。より充実した活動であったのではないかと思います。伐採するのでも大変ですが、その後の枝落ちした丸太をかついで運ぶ作業は、本当にきついというか、気合いが入るというか大変な作業でした。今回は、久しぶりで自分の植林した苗木もすくすく育っており、今まで伐採して整備してきた森が明るく元気になっていることも確認できました。

陽のさしかたが違い達成感

■ 次回は春の植林を是非経験したいと思っています。予想以上にハードな伐採作業で気持ち良い汗を流すことができました。伐採前と後

ではあきらかに陽のさしかたが違い、達成感のある作業でした。小菅の湯も、とても気持ち良かったです。

何もかもが新鮮だった

■ 今回、初めての参加でしたので、何もかもが新鮮だったのですが、今後取り組みたいこと、2点一、植栽 前回の植栽の状況を目の当たりにして、正直うらやましかったです。私も自分の木を植えて育てたいと強く思いました。

二、小菅村やNOSの森の取り組み、森のしくみ、などを学びたいと思います。既に講習会などが実施されていると聞いていますが、自分が理解して取り組むのとは、雲泥の差があると感じています。社内でもそのような会があれば是非参加したいと思っています。

大勢集まれば大きな力になる

■ 本来なら植林から20年ぐらいの間伐するところ、40年ぐらい経過した木を切りましたので、切るのも運び出すのも大変でした。倒した木は3m間隔で切断し運びましたが、見ると重そうに見えませんが、2人掛かりでも根本から2本は重くて運ばませんでした。一人の力はたかが知れていますが、大勢集まれば大きな力になることを感じました。